

風土、文化、造形 – 人工構造物が示す光の効果 (3)

Climaité, Culture and Art

- Artificial structures has been shown (indicated) the lighting effects - (3)

神田 每実

KANDA Tsunemi

Built on a rocky hill 157 meters above sea level, the Parthenon is beautiful, powerful, graceful and massive. This temple is illuminated by the morning sun at the earliest in Athens. The daily life of the city of Athens begins with the brilliance of this temple.

Most temples built in ancient Greece were built along an east-west axis. That's why the Parthenon and the hilltop sanctuary greet the sun before anyone else and see it off longer than anyone else. The temples and the hill of the Acropolis, which change their appearance in various ways according to the movement of the sun, hide interesting mechanisms deeply related to the visual arts.



Fig.1 アテネ周辺の高空からの眺め
Google Earth Pro から取得したデータに加筆
筆者作成 2022年10月5日

1.

北緯 37 度 58 分 / 東経 23 度 43 分、アクロポリスの丘¹⁾は、ギリシア共和国の首都アテネの市街地にそびえている。Fig.1はアテネ周辺の地形を高空から眺めたものであり、黄色い円はアクロポリスの丘を中心とした半径約 25kmを示している。アテネを擁する平原が、大小の起伏を含みながらも全体的には南西矢印方向に向かって緩やかに下っていること、アクロポリからの視界は、東・北・西を山地によって遮られていることなどが理解される。

北緯 37 度 58 分は、日本では米沢市、ア

アメリカ合衆国ではケンタッキー州中央部のレキシントン市あたりである。夏至を境に太陽が南へと折り返していく北回帰線は、北緯 23 度 27 分あたりであるから、アクロポリスの丘はそこから約 14 度も北に位置することになる。本稿では以降この丘を「岩丘」と記しながら、この岩丘が示す「光の効果」について考えを進めていく。

「重厚さ」と「優雅さ」、あるいは「力強さ」と「美しさ」の双方を「融合」させた古代ギリシア建築の最高峰アテネのパルテノン神殿²⁾(以後パルテノン神殿と表記)の遺構が、海拔 157m の岩丘上に朝日を浴び輝き始める。アテネの日常・アテネの市民生活は、創建以来常にその輝きと共にあるのである。太陽は東の山地の向こう側からやや南の軌道を通して昇ってくるのだが、アテネの平原に朝日をもたらすためには少し高度を得なければならない。高度を得た太陽からの直射光は、パルテノン神殿に最も早く届けられる。Fig.2 は、2004 年の夏にアテネ市で行った定点撮影の際に撮影した写真のうち一枚で、パルテノン神殿の正面とされる東北東面の列柱が、太陽直射光を受けた間にシャッターを切ったものである。照らされているのは神殿の東北東面だけであり、太陽光は未だアテネの街には充満していないのである。

Fig.2 は広角レンズを用いて撮影した一枚であり、岩丘上の神殿のみが強い反射光を放っていることが確認される。神殿を戴く岩丘には、まだ太陽の直射光は届いていない。Fig.3 は Fig.2 の神殿とその周辺をトリミングし拡大表示をしたものであり、Fig.4 は Fig.2 の撮影の僅かの後にフィルムに収めた映像である。僅かの経過時間とは、レンズ交換に要した数秒である。



Fig.2 太陽光直射を受けた瞬間のパルテノン神殿
アテネ 筆者撮影 2004 年 9 月 11 日
Nikon F100 / SIGMA 14mm 1:28D / FUJI RDP III



Fig.3 Fig.2 の部分的拡大

アテネ 筆者撮影 2004年9月11日

注：別に撮影した Fig.4 との比較を行うために、同じ構図にトリミングをおこなった。



Fig.4 太陽光直射を受けたパルテノン神殿とアクロポリスの丘上部構造物部分

アテネ 筆者撮影 2004年9月11日

Nikon F100 / Nikon 28-200mm 1:35-56D/ FUJI RDP III

Fig.3 と Fig.4 の二枚を比較すると、神殿をはじめ、岩丘に施された擁壁やその倒壊を防ぐことを目的として設けられた控え壁に宿る明暗のコントラストに明瞭な違いが生まれていることが確認される。また、太陽光を受ける神殿正面の梁に設けられたレリーフの凹凸や、フルーティング³⁾と呼ばれる加工が施された円柱等が、それぞれの形態に即した様々な発色を示していることも確認される。「ぼんやり」「はっきり」、「柔らかい」「硬い」、「明るい」「暗い」。光の入射角とそれを「受光」する構造物を構成する面の角度が生み出す「光の反射」は、人間の形態把握に大きな影響を及ぼすとともに、「物体」を構成する「物質」に対する感受にも大きな影響を及ぼすのである。

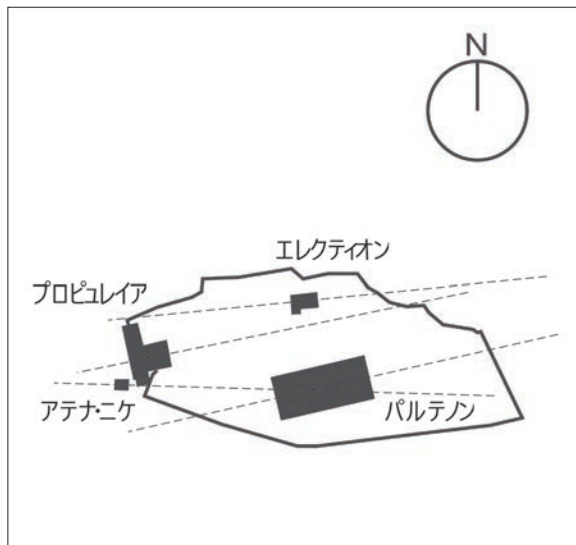


Fig.5 アクロポリスの平面と主な構造物の配置
Google Earth Pro の鳥観写真を参考に作成
筆者作成 2020年6月

Fig.5 は、古代ギリシア文明が遺した4つの傑作であるパルテノン神殿、神域入り口の門であるプロピュレイア⁴⁾、エレクティオン⁵⁾、アテナ・ニケ神殿⁶⁾のおよその大きさと岩丘上での位置を示したものである。プロピュレイア、パルテノン神殿は、東西南北の軸に対して反時計回り方向に約15度旋回しており、エレクティオンも同方向に約4度旋回している。ほとんどの古代ギリシアの神殿と同様に、岩丘上の神殿は東側に正面を持っており、プロピュレイアもこれに倣っているように見受けられる。しかし、プロピュレイアが岩丘上の広がりへの入り口であることを考えれば、この神域は西南西向きであると解釈することにも整合性

が生まれてくる。神域に「表裏」が存在するか否かについては正確には知らないが、この神域において「正面性」の存在を是とするのであれば、アクロポリスへのアプローチは神殿の正面からではなく神殿の背面からということになる。神域の表は夕日と正対する側であり、神殿の表は日の出側ということなのであろうか。

朝日と夕日、日の出と日没。太陽は双方を繋ぐように移動していく。Fig.1 から理解される岩丘の地理学的環境は、われわれに、岩丘上の神域は視界の先に広がるサロニコス湾、更には海洋に向けて自身の姿を投げかけているように思わせるのである。しかし、例えばこの神域が、何らかの理由で全方位性を前提としているとすれば、太陽光と正対することのない面が示す効果への思考が必要となるのである。それは太陽光と正対することのない面に宿る「影」と「陰」についての思考である。ともあれアテネの平原に現れる太陽は、東から南、そして神殿の西側へと回り込むように移動しながら常にこの神域を照らし、神殿はその輝きを自らが発するかのように視界の彼方へと届けるので

ある。

およそ地球上に存在する物体は、曲面と平面もしくはその組み合わせによって構成されている。「線」は「点」の連続でありその一区切りが「線分」であり、そこには「長さ」という「価値」が出現する。その線分という一区切りが、自身が伸びようとしていた方向とは別の方向へ、例えば横方向に移動、あるいは回転をすると、その結果として「面」という広がり「面積」という価値をもって姿を現し、その面が、今度は縦方向に移動すると「体積」という価値を持った「立体」が出現する。もとをただせば「 \cdot 」である。数学における説明としてこれが正確を期しているかということについては定かではないが、仮にこの考えを認めるとするならば、われわれは大きさを持たないとされる「 \cdot 」から発する価値、あるいはそれらが示す「価値の基準」に取り囲まれて生きていることになるのである。

人類が住み家とした洞窟のほとんどは、例えばその母体となる山を構成する鉱物の特性をむき出しにしながらも、大まかには曲面と感じられる面によって構成されていたと思われるし、やがて自らの手で自然物に加工を施して作り出した部材による創作物としての家屋も、手仕事ゆえの何らかの、あるいはいくらかの曲面を持っていたと思われる。完全な平面や直線を作り出すためには厳密な基準が必要である。その様な基準を満たした面なり、それによって構成された人工物、人工構造物を作り出すことが可能となるまでには、それ相応の時間が必要であったはずである。石斧や鎌を眺めても、素材と加工法の影響によるとしても、その全体を「凸面」と「凹面」によって構成するものがほとんどであるように思われる。人体を眺めてもどこにも平面は存在しないように思われる。水に代表される液体はその「物理特性」から平面を作り出すが、何らかの理由で固体化しない限りはその状態を保持できない。おそらく人類は、平面のはじまり、限界としての直線の姿を示すことができる何物かを自然物から取り出すことが出来るようになるまでは、圧倒的に長い時間を曲面と共に過ごしたに違いないのである。

生命活動を行うものは常に変化し続け、同じ姿を留めおくことはない。それらは全て曲面をもって自身を形成している。曲面、あるいはその「連続」「連結」「輻輳」「せめぎ合い」の様子に、人間は千変万化する運動の「リズム」「姿」、恐らくは「柔らかさ」「硬さ」「温度」「体温」等の様子を感じるのである。そして、それを「感知」させるために、つまり「知る」ということに至るために必要な、「仕掛け」「仕組み」「機能」の内在って最も大きな役割を担うものが「視覚」であり、視覚を機能させるために必要な「刺激」「情報」としての「光」、特に「反射光」なのである。

「細い」「太い」「短い」「長い」「狭い」「広い」、それらは全て物理的な様子を示す言葉、情報である。およその場合、物質によって作られた物体の様子は、物質の「表面」あるいはその表面からいくらかの深度を持つ面から、その量の大小、強弱にかかわらず投げかけられる反射光によって観る者に届けられる。それらの様子を受感させることにつながる情報には、その物質に付随する特性に関する情報も含まれている。われわれの日常を満たす反射光は、われわれを取り囲むすべての「物」が持つ「物理的情報」と「物質的情報」をわれわれに運び届け、われわれを取り囲むすべての物は

その反射光の受光によって更に新たな輝きを放ち続けるのである。

「岩丘上の都市」を戴くこの丘は、自身を構成する様々な「構造」「形」に、太陽照射光によって生成される明と暗の推移を纏っている。岩丘と神殿の遺構は、千変万化する価値の姿を、自身が放つ視覚刺激によってその巨体に再現するのである。Fig.6は、その様子を11枚の写真で紹介するものである。



Fig.6 アテネのバルテノンとアクロポリス：薄明から薄暮までの陰影の変化

アテネ 筆者撮影 2004年9月11日

Nikon F100 / Nikon 28-200mm 1:35-56D/ FUJI RDP III

①時系列：1-A → 1-B → 1-C → 2-A → 4-B

②撮影時間：バルテノンの太陽光受光 夜明け前から夕暮れまで

Fig.6は、2004年に行ったデジタルカメラを使用して行ったインターバル撮影と並行して行った、銀塩カメラによる撮影で得られ写真を、時系列にそって並べたものである。薄明から始まって夕暮れに至るまで続けた撮影によって、岩丘がアテネの街に投げかける様々な変化の様子を知ることが

出来る。全てがうつろな夜明け前、全てがうつろに向かう夕暮れの到来。しかし驚くべきことは、岩丘と神殿が南中の太陽光を受容した瞬間に、天然の岩塊や人工の擁壁やそこから突出することで生成される強い光と陰影のコントラストを見せていた控え壁さえも、太陽直射光の中にまさに飲み込まれてしまうということなのである。2-C がそれにあたる。それはまさに白昼の闇であり、薄明と薄暮の中間に訪れる立体感喪失の瞬間なのである。

われわれを取り囲む価値の全ては独自の「形」「姿」を持っている。あるいは与えられている。つまり形は価値の姿を現している。価値の姿として現れる形は、人間の「行為」「仕事」「労働」「運動」の結果生み出される。それらは人間の「身体」「肉体」の「動き」と、何らかの物体、物質との接触によって生み出される。独自の形は、独自の人間の独自の動きによって生み出される。独自の人間による独自の動きが物体や物質と接触するとき、独自の価値が生み出されていく。独自の価値は、人間の独自の動きの「軌跡」を示している。「動き」「運動」には「出発点」と「終点」が存在している。「点に始まり点に終わる軌跡の集積」が、独自の価値を生み出しているのである。たかが「点」である。その「たかが点」を始点として生み出された直線と曲線はそれぞれに独自の価値を示す。そしてそれらの、連結、結合、あるいは輻輳により新たな価値が生み出される。その価値はそれぞれの価値を「補完」し合うことで、それぞれの価値では示し得ない価値、あるいはそれぞれ単独ではその価値を示すことを許さない「環境」においても自身の姿を示そうとする。「曲面の全方位性」と「平面の正面性」がその機能を果たすのである。



Fig.7 アッタロスの柱廊

アテネ 筆者撮影 2003年9月

Nikon F100 / SIGMA 14mm 1:28D / FUJI RDP III

Fig7は、アクロポリスの丘の北西に位置するアッタロスの柱廊⁷⁾と呼ばれる建築の西面を構成する列柱の様子を捉えた写真の一枚である。向かって左側の列柱を構成する柱の下部三分の一には、縦方向に幅広の面取りが施されており、残りの上部三分の二には下部の面取りの幅を基準にしたフルーティングが施されている。柱の上部の柱頭⁸⁾は、簡素な印象を観る者に与えるドーリア式であるが、柱全体から受ける印象は、多くのドーリア式の柱に見られる「堂々とした」、あるいは「質実」といった印象ではなく、イオニア式、あるいはコリント式の柱を思わせるような、縦方向へと伸びる印象を示すものである。一方、写真右側に並ぶ柱は、柱頭は瀟洒なイオニア式でありながら、柱本体は逆に堂々とした印象を示すドーリア様式を思わせるものであり、フルーティングによる縦方向の造形と陰影を纏う画面左側の柱に比べて、古代ギリシア建築の円柱の特徴の一つであるエンタシスによる効果とも相まってふくよかな印象を示すものとなっている。Fig7に示された二種類の柱は、柱の面に施された三種類の造形がもたらす光の反射の様子と、それにより示される視覚的な印象の差異をわれわれに分かり易く説明をしていると考えるのである。

Fig8は、パルテノン神殿北東の角から撮影した一枚である。風化と破壊行為の影響により、柱の表面には新たに様々な「視覚情報」がもたらされ、それはまた異なった感慨を観る者に提供している。

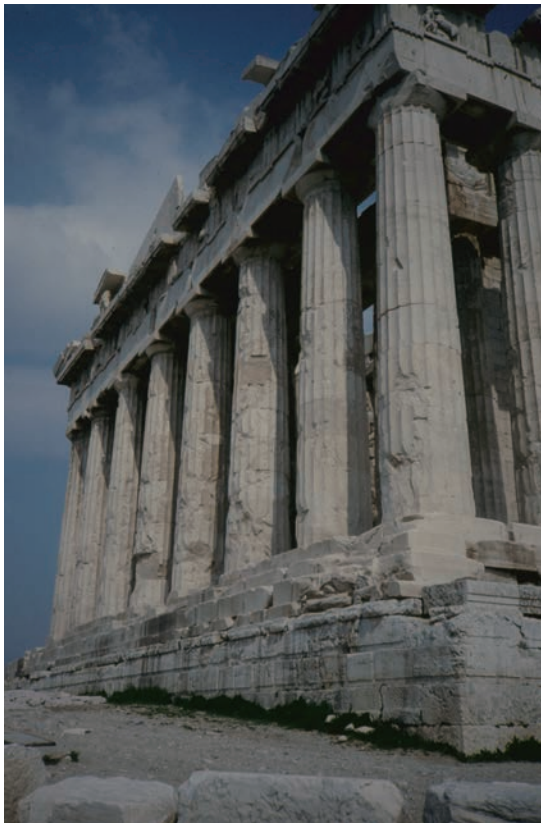


Fig.8 パルテノン神殿（南西面列柱）
アテネ 作者撮影 2003年9月



Fig.9 フルーティング（アッタロスの柱廊）
アテネ 作者撮影 2003年9月

そしてそれは、われわれの持つパルテノン神殿のイメージの生成に深く影響を与えている。Fig.9に映し出されている全く損傷の見受けられないフルーティングをこの神殿に代入してみることで、われわれは創建当時の神殿がアテネに示した姿に一步近づくことが可能となるのである。

この柱廊は、現在のトルコ共和国に存在した古代都市国家ペルガモンの王、アッタロスがアテネで学んだことの礼として作られたと言われている。ペルガモンはエーゲ海東岸の小アジア半島に位置する。その小アジア半島の東には広大なアジアの文化圏が控えている。アッタロスの柱廊の列柱がパルテノン神殿をはじめとする他の神殿のものとは異なった造形を示す理由は、時代と地域を隔てるがゆえに生成される「実存感」「現実味」の差異によるのかもしれない。アッタロスの柱廊の列柱が示す造形様式とそこに宿る陰影の変化は、古代の人工構造物が示す光の効果とその仕組みを説明する好事例なのである。そしておそらくそこには、「風土」「地勢」と造形物が示す「様式」との関係に関する研究の具体的な手がかりが潜んでいるのだと考えるのである。

地域を支配する王の象徴から、国家の象徴へと変化したアクロポリスの姿には、より多くの価値観を収束させる力が求められたに違いない。それゆえアクロポリスは、時代の価値、価値観とその「変遷」を自らの様式に重層的に示しているに違いない。



Fig.10 女神像
アテネ国立博物館 アテネ 筆者撮影

アクロポリスに遺るパルテノン神殿、プロピュレイア、エレクティオン、アテナ・ニケ神殿は、いくつかの建築様式と新たな試みを含むドーリア式の列柱を備えている。個々の柱は基部から最上部までフルーティングが施され、恐らくその効果によって、簡素で堂々とした雰囲気の特徴とするドーリア様式を踏襲しながらも、重苦しさを排除した「洗練」「都会」「知性」といった言葉を想起させる佇まいを見せている。

Fig.10は、女神像が身に纏う衣に現れる襞の様子を示すために撮影をした一枚である。女神像は、陰影を孕んだ襞を自身の全周に配置することで、物理的大きさを維持ながら造形表現に不必要な余分な物量感から自身を開放しているのである。

フルーティングを施された列柱群は、太陽光の移動と共に自身が纏う明暗を変化させながら、柱の垂直と梁による水平を基本とする神殿の姿に独自の視覚刺激を生み出し続けていく。構造物に宿る光が生み出す明暗の推移。岩丘は、天然の

岩塊とそこに直立する人工の擁壁とそれを支える控え壁と丘上の構造物の統合として存在している。Fig.6に現れる岩丘そのものが示す変化の仕組みも、女神像の造形と基本的に同じ原理によるものなのである。

古代ギリシアの神殿等に現れるこの柱の構造は、逆フルーティングとでも表現が可能と思われる様式をもって、古代エジプト文明の神殿の列柱にも登場する。そしてその列柱に現れる形態的特徴は、古代エジプト彫刻における表現様式の特徴と共通性を持つように思われる。そのことを仮に認めれば、古代の人工構造物を代表する建築やそこに施された造形が示す光の効果もまた、「時代の精神」、あるいは「時代の価値観」を示すための方法論に則していると考えることが可能となるのである。それは「豊かさ」「心地良さ」、あるいは「それらと真逆の感覚」につながるものであったとしても、それらの表出のためには、その地の光の状況の理解に基づいた反射面の角度と形態、その表面状態とそれらを創り出すための素材が必須となり、更に必要となれば、それらに彩を与える「色彩」も予定することになるのである。

Fig.11は古代エジプト文明の遺産であるルクソール神殿の列柱である。Fig.7とFig.8に示したフルーティングを施された石柱とは真逆の造形が施されている。何本かの細い円柱を束ねたようなこの柱は子供が描く花びらのような断面を持っており、複数の凸面が示す外向きの指向性によって内から外へと膨らもうとしているかのような印象を観る者に与える。Fig.12は単純な円柱を背にした巨大な彫刻である。Fig.11の柱の造形にもみられる石塊への大胆な掘り込みが、彫刻を構成する面に強い明暗のコントラストを生み出している。巨大人工構造物と彫刻という立体造形物の間の「特徴の類似の構造」が異なる文明圏においても認められ、その手法とそこに生まれる効果についての選択が対照的であることは、造形様式と風土の関連について考える者にとって実に興味深い事なのである。



Fig.11 ルクソール神殿の列柱
ルクソール 筆者撮影



Fig.12 ファラオ像
ルクソール神殿 筆者撮影

古代ギリシアの多くの神殿と同じように、パルテノン神殿もその内部に神殿としての機能の一部を担う場所を持っている。その空間は壁によって囲まれた人工的で、黄金と象牙で作られていたという巨大な守護神を際立たせる広がりであったのであろうと想像する。その広がり外周は、フルーティングを施された円形断面を持つ円柱群によって囲まれている。Fig.7、Fig.8でも確認されるように、自らが投げかける反射光と共に、列柱群は視界を遮る壁として観る者の前に立ちはだかる。円柱を構成する曲面から放たれる拡散光とその奥に生まれる暗がり。更に列柱上にあつて屋根へとつながる梁に設けられた幾何学形態の凹凸とレリーフによる有機形態により生み出され視覚刺激。訪れた者の注意は無機的な平面にではなく、まずは変化を続ける列柱群に向けられるであろう。

パルテノン神殿において圧倒的な広がりを示したものは、与えられた緩やかな傾斜によって斜め上方の天を仰いでいた屋根のはずである。この神殿の位置するところは海拔 157m の岩丘上である。更にこの神殿は、Fig.5でも示すように岩丘上の広がり南側の際に沿うように建てられている。そのため太陽照射光を直接受けることのない神殿の北側の様子は、麓からは勿論、岩丘上部を見通すことが出来る位置まで移動しなければうかがい知ることが出来ないのである。もっともこの岩丘の北面には、少女の姿の丸彫り彫刻を柱としたことでも有名なエレクトイオン神殿や他の構造物が存在し、その姿でもって視界は遮られていたと思われる。そのためパルテノン神殿の遺構とそこに始まる想像のみを頼りにこの岩丘上の神域を考えることは十分ではないと思われる。実際、多くの構造物は今に原形をとどめていないのである。まずは現存する遺構とそこに現れる現象について観察することから始めるほかは無いのである。

本学紀要第 51 号への投稿において、日本の古墳の形態を対象として、円形と方形、平面と曲面に現れる視覚効果の比較についての考察を述べ、更にその両方の面を合わせ持つ形態である「ホタテ型古墳」「前方後円墳」が発揮する視認性、視認効果についての考えを記した。それは曲面と平面を併せ持つことで双方の視認性に補完関係が確保され、それによって総合的で恒常的な視認性が確保されるということ、そして古墳と呼ばれる人工構造物が、その総合的で恒常的な反射光の効果をもって、新たな「環境」を地域に生成するということを記すものであった。Fig.6において提示された神殿を含む岩丘の姿の変化は、その視認性の補完の仕組みを体現しているのである。

凹面の連続によって全体を構成するパルテノン神殿の列柱と古代エジプトの列柱は、その受光と反射の差異とそれによって現れる効果の差異によって、自身の「存在」、「在り方」についての考え方を示しているのである。そしてそれを際立たせるために奉仕するものが、日の光に照らし出される面の裏側に生み出されている対照的な視覚世界である。Fig.6において確認される状況と対照的な状況がその裏側に生み出されているのである。「光」と「闇」、「照らし出されるもの」と「潜むもの」。パルテノン神殿の列柱は、自身に施されたフルーティング全てにその双方を同居させようとするのである。「昼」と「夜」、「朝」と「夕」、「日の出」と「日没」、「薄明」と「薄暮」、その組み合わせが示す光の効果と総体の姿に、人類は引き寄せられ続けるのである。アクロポリスの南岩壁面には、ロマネスク教会の巨大化への対応策として生み出され、後のゴシック教会建築の飛梁へとつ

ながる大小、高低の控え壁が太陽光を受けて浮かび上がっている。それらは、天然の岩壁とその上に築かれた人工の擁壁からなる岩丘の南面に対して視覚的な「安定感」と「律動感」、あるいは「安定感」と「躍動感」の提供に貢献している。物理学的な必要に寄与する目的で作られ出された構造と視覚の「合理的な補完関係」は、岩丘全体を「自然」と「人間」の手による巨大な構造物として観る者に感受させる働きを担うのである。それは「明確で厳格なイメージ」とそれを生み出す豊かな「想像力」をして相反する存在を統合する力が古代ギリシア世界に宿っていたことを証明するものであって、アテネにそびえる岩丘はその「物的証拠」なのである。



Fig.13 パルテノン神殿（南東より）
アテネ 筆者撮影 2004年 9月 11日



Fig.14 飛梁（ノートルダム大聖堂）
パリ 筆者撮影 1989年

2.

表.1 パルテノン神殿、アテナ・ニケ神殿、エレクティオン神殿、プロピュライアの変遷

BC447-438年	パルテノン神殿の建設 / 彫刻による寺院の装飾 BC438-432
BC437-432年	プロピュライアの建設
BC421-406年	エレクティオンの建設
BC427-420年	アテナ・ニケ（ナイキ）神殿の建設
AD343-361年	パルテノン神殿の修復、おそらくユリアヌス帝による
AD500年	パルテノン神殿とエレクティオンのキリスト教会への改宗
AD110年	宮殿としてのプロピュライアの配置
AD1458年	パルテノン神殿のモスクへの転換 オスマン帝国時代、エレクティオンをハーレムの住居に転換。火薬庫としてプロピュライアを使用
AD1687年	プロピュライアの爆発と中央の建物の上部構造の破壊 アテナ・ニケ神殿の解体
注：各構造物の建設、転用、解体の年代については、Maria Brouskari,(2001年). "The Monuments of the Acropolis". 及び、以下の URL https://www.britannica.com/ , https://www.worldhistory.org/Acropolis/ より取得し表の作成を行った。 作成：2022年9月10日	

表.1は、パルテノン神殿に関わる創建以降の主だった歴史をкаいつまんでまとめたものである。

かつてその内部に、主神アテナ・パルテノスを祀ったと言われる神殿は、神域の拡張、支配者や主の交代、更には戦禍等による様々な「変容」「変質」「破壊」を体験してきた。それらの変容は、

建設当時の目的を知る者からすれば、おそらく不本意なものであったに違いないのであるが、同時にその変容の甘受によってこそこの巨大な人工構造物が今日にその姿を伝え得たのだとすれば、それもまた「意味のあること」であったと考えることもできるのである。「変容」「変質」「破壊」、その変遷の様子を想像するとき、皮肉にもこの神殿は「時代と共に変わっていく流行をその都度纏うことで近年まで永らえ、遂には近代兵器による戦争という人為の災厄によりその流行を脱ぎ捨てることになったことで、かえって多くの者を魅了する何かを宿す姿を現すことになったのかもしれない。」という考えに筆者は至るのである。

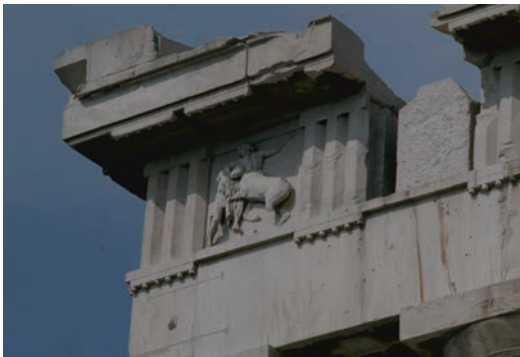


Fig.15 梁を飾る浮彫り
パルテノン神殿 アテネ 筆者撮影



Fig.16 梁を飾る浮彫り
パルテノン神殿 アテネ 筆者撮影

神殿内には、黄金と象牙で作られたアテナ・パルテノスの彫像が存在していたことや、神殿を構成する列柱の上部に巡らされた梁等の建築を飾る彫刻やレリーフ群には鮮やかな彩色が施されていたこと、それらにはどの素材が用いられていたかということ、あるいはどの時代のものであるのかというような、この神殿の具体的な姿に関わる様々な「情報」が、近年の「科学的調査」の結果蓄積され明らかになって来ている。とはいえ、Fig.15やFig.16に見られるような紛争による篡奪や、歳月と自然環境による風化、損傷、更には、収蔵先の博物館における不適切なクリーニング等が招いた「物そのものの損失」「物的証拠による検証の可能性の損失」は、未だ研究者たちの前に高い壁となって立ちはだかっているようにも思われる。

岩丘の上に遺っているものは、「遺跡」「遺物」「廃墟」「痕跡」である。それは人間の「創造と破壊の軌跡を示す痕跡」である。良好な保存の状態を示す古代の人工構造物を他に求めることはいくらかでも可能であるように思われるのである。しかし、それにもかかわらずこの「高い壁」、あるいは「研究」という名の途方もない労働に身を投じる多くの専門家が存在しその後継者は後を絶たず、また多くの観光者が引き寄せられるようにこの岩丘を愛で、その頂上へとまるで巡礼をするように足を運び続ける。黄金と象牙によって飾られた女神像はここにはもう存在していないにもかかわらず。

表.1の内容によれば、神殿、恐らくは神域全体の変容は、支配、被支配の関係の変化によってもたらされてきたことが理解される。「被支配者の標榜する価値」は、「支配者の標榜する価値」によってしばしば「上塗りされる」「埋められる」、あるいは「削り取られる」のである。その事例は古今

において枚挙のいとまがないが、それ自体、支配者たろうとする者の「存在の意味」「存在の価値」を賭けて行われるためにしばしば苛烈を極めるのである。その苛烈さは、恐らくそれによって葬られる「他者の価値」を上回ろうとするために現れるのである。葬るために放出されるエネルギーは、葬り去られる価値が放出するエネルギーの大きさを示すのである。しかしその苛烈を極めるエネルギーは、果たして常に他の価値の放つエネルギーを凌駕しえるのであろうか。

例えば現在のトルコ共和国第一の都市イスタンブールに現存し、今は回教寺院として残る聖ソフィア寺の内部壁面には、その美しさゆえにスルタン自身が破壊を止めさせたモザイクによるキリスト像が存在している。また転用のための幾つかの現実的な機能を付すことでその姿を残している聖ソフィア寺の遍歴は、岩丘上の神殿やアクロポロスの遍歴を实によく説明するのである。

それは、「理性」「理念」といったある種の冷静な思考に基づくものではなく、一種「感情的」「本能的」な精神の反応によるものではなかったかと想像するのである。ならばそれは、自身の標榜する価値さえも引き寄せる磁力を備えた「驚き」であり、恐らくわれわれが「美」という言葉で表現しようとするものが備える「力」なのである。そのような事例は、われわれの生活の至る所において確認される。例えば、宝飾品の所有、あるいは高名なデザイナーや芸術家の手による芸術作品の所有が、個々の自己実現、自己の表出を果たすことに機能しているのだと考えるとき、小高い丘の上の都市の所有は、自らが標榜する「理想」「価値」とその「価値大きさ」を、岩丘とその頂から放たれる「美」によって示すことを意味したのであり、まさに数々の宝石が光を放つ王冠を自らの頭上に戴くということであったのだと考えるのである。海拔157mの岩丘上のパルテノン神殿は、常にその象徴であり続けることによって、今にその姿を留め得たと考えるのである。



Fig.17 キリストのモザイク
アヤソフィア寺 イスタンブール
筆者撮影 1989年



Fig.18 改修中のアヤソフィア寺内部
イスタンブール
筆者撮影 1989年

1687年、ヴェネチア軍の砲撃を受けたことで発生した弾薬の誘爆により、火薬庫として使用されていたプロピュレイアとパルテノン神殿の上部構造である屋根が失われた。屋根の損失は、神殿の内部構造への、「風雨・紫外線・温度変化」などの厳しい自然環境の直接の侵入を許すことを意味する。それは消滅へと向かう道を進むことを意味するものである。しかしこの姿をしてなおこの神殿を「愛でる言葉」「称える言葉」「重要性・貴重さを述べる言葉」が絶えることはない。「感情によるもの」「哲学的思考によるもの」「歴史的価値によるもの」、あるいは「数理に代表される合理性に基づくもの」、それらのすべてが果たして理にかなったものであるのか、あるいはそうでないのかについての判断は知らないのであるが、ギリシア政府による修復事業、欧州連合の参画、1987年の世界文化遺産の登録といった取り組みと努力継続は、この神殿の持つ文化的価値が冷静に評価された証であるとともに、破壊されてもなお観る者を引きつける磁力についての多方面からの「科学的」「合理的」な研究が物的証拠に基づいて積み上げられるという意味を持つものなのである。

われわれの脳は、認知に関わる情報を受感することによって演算を開始する。その中で大きな役割を果たすものが「視覚」に関する情報であって、それは「美」「醜」の判断に関わる「演算の開始」に大きく関係をする。「美」「醜」に関わる刺激は、視覚に関するものが全てではないとしても、その重要性において変わりはない。

極めて多くの人々がこの破壊された神殿や神域を愛でる。もちろん往時の神殿、神域の姿を知る者はいない。われわれはこの神殿、神域を築いてきた者たちが目指したものの「断片」「断片の集合」の姿、様子を眺めているのである。破壊された姿を詣でるといふ行為にわれわれを誘い、詣でる行為を繰り返させるものは何か。われわれは何を眺めているのか。ミロ島で発見され今はパリ市のルーブル美術館に収蔵されるヴィーナス像から感受される美が、その両腕の欠損を補おうとする鑑賞者の想像力に依拠するのであるとする考えは広く知られている。仮に同様の作用がここにも働いているのであれば、そこにはその欠損を補う想像力を働かせるために必要な何かが実態をもって存在しているはずである。廃墟と化したパルテノン神殿やアクロポリスの神域は、われわれを飽くなき想像へと誘う認知に関わる情報をアテネの日常に常に発しているのである。それは破壊を被ってもなお、人間を惹きつける力を持つ情報を発し続ける仕組みの存在によって実現されるのである。その仕組みとは、われわれに「美」を受感させる仕組みである。ゆえにそれは少なからず視覚情報に関わる仕組みであり、具体的にはその地域の風土、環境と光の反射に関わる仕組みなのである。

物的証拠に対する検証は、「工学」と「人文学」という両科学を総合した取り組みによって様々な専門の知見を交えて進められる。それは物的証拠としての物体の表面やその物体を構成する物質に現れる、あるいは現れているような変容、変質を手掛かりに、かつてそこに生成され、示されていた価値、意味についての思考を含んで行われる。そしてその思考のための観察は五感により得られる「認知情報」に基づいて行われ、その中で中心的な情報収集の役割を担うものが視覚である。それゆえにわれわれは、アテネのパルテノン神殿の遺構、アテネのアクロポリスの遺構、更にはアテ

ネのアクロポリスを取り囲む遺構を含めた環境から受け取られる視覚情報を手掛かりに、人工構造物に現れる光の効果とその意味するところについての読み解きを試みる事が出来るのである。アテネにそびえる岩丘は、その歴史のはじまりにあった岩の丘に対する人工構造物の付加とその堆積によって生み出されている。それは自然と人間の営みの連結、せめぎ合い、融合による一つの回答の姿を示す巨大な物的証拠なのであり、われわれはそれらが示す光の効果にそれを確認するのである。

参考文献

- ・ Richard Economakis (Author), Mario Bettella (Photographer), (2010 年). "Acropolis: Ancient Cities". Trans-Atlantic Publications, Inc.
ISBN 1902889061
- ・ Maria Brouskari, (2001 年). "The Monuments of the Acropolis". Archaeological Receipts Fund.
ISBN 960-214-158-1
- ・ ΜΑΝΟΛΗΣ ΚΟΠΠΕΣ, (1993 年)
"ΑΠΟ ΤΗΝ ΠΕΝΤΕΛΗ ΣΤΟΝ ΠΑΡΘΕΝΩΝΑ."
ΕΚΔΟΤΙΚΟΣ ΟΙΚΟΣ "ΜΕΛΙΣΣΑ".
ISBN 960-204-018-1
- ・ Nicholaos Chr. Stanpolidis (Ed), (2003 年).
"SEA ROUTES..." FROM SIDON TO HUELVA INTERCONNECTIONS IN THE MEDITERRANEAN 16th-6th c. BC.
CULTURAL OLYMPIAD.
ISBN 960-7064-40-2

註

- ¹⁾ 古代ギリシアのポリスのシンボルとなった小高い丘のこと。「高いところ」「丘上の都市」を意味し、防壁で固められた自然の丘に神殿や砦が築かれているのが普通である。
- ²⁾ 古代ギリシア時代に、アテナイのアクロポリスの上に建設されたアテナイの守護神である女神アテナ・パルテノスを祀る神殿。古代ギリシア建築の最高傑作。
- ³⁾ 梁を支える柱に施された溝。建築の要素としてリズムを重要視した古代ギリシアで用いられはじめたとされる。もとは水や氷の作用により細長い穴などがあくこと。柱の中心方向に対して凹面の掘り込みが施される。
- ⁴⁾ アクロポリスに入るための門。儀式上清浄ではないとされた人々が聖域に近づくことを制御する働きを担った。
- ⁵⁾ 当初アテナの女神像が安置されていたイオニア式建築の代表作。6体の少女像が屋根を支える人型の柱で有名。紀元前406年に完成。
- ⁶⁾ アテネのアクロポリスの南西端に建つ、勝利の女神ニケに捧げられた古代ギリシアの神殿。紀元前427年から7年をかけて建設。
- ⁷⁾ ペルガモンの王アッタロス2世がアテナイで学問を学んだことに対する謝礼として寄贈した、アテネのアゴラ内にあるのである建築物。1950年代になって博物館の建物として復元。古代建築物の忠実な復元がなされている。
- ⁸⁾ 建築物の柱の頭部。柱の中と梁が接続される部分。その形状などによりドーリア式、イオニア式、コリント式などの様式がある。

参考 URL

- パルテノン神殿 <https://ja.wikipedia.org/wiki/パルテノン神殿>, <https://www.britannica.com/topic/Parthenon>
アクロポリス <https://ja.wikipedia.org/wiki/アクロポリス>, <https://www.worldhistory.org/Acropolis/>
アテネ <https://ja.wikipedia.org/wiki/アテネ>
アテナ・ニケ神殿 <https://www.worldhistory.org/article/62/temple-of-athena-nike/>

表

表.1 パルテノンパルテノン神殿、アテナ・ニケ神殿、エレクティオン神殿、プロピュレイアの変遷

注：各構造物の建設、転用、解体の年代については、Maria Brouskari,(2001年). “The Monuments of the Acropolis”. 及び、以下の URL <https://www.britannica.com/>, <https://www.worldhistory.org/Acropolis/> より取得し、表の作成を行った。
作成：2022年9月10日

図版キャプション

- Fig.1 アテネ周辺の高空からの眺め：Google Earth Pro から取得したデータに筆者加筆，2022年10月5日
- Fig.2 太陽光直射を受けた瞬間のパルテノン神殿 / アテネ：筆者撮影，2004年9月11日
Nikon F100 / SIGMA 14mm 1:28D / FUJI RDP III
- Fig.3 Fig.2の部分的拡大 / アテネ：筆者撮影，2004年9月11日
別に撮影した Fig.4 との比較を行うために同じ構図にトリミングをおこない作成
- Fig.4 太陽光直射を受けたパルテノン神殿とアクロポリスの丘上部人工構造物部分 / アテネ：筆者撮影，
2004年9月11日，Nikon F100 / Nikon 28-200mm 1 : 35-56D / FUJI RDP III
- Fig.5 アクロポリスの平面と主な構造物の配置：Google Earth Pro の鳥瞰写真を参考に筆者作成
- Fig.6 アテネのパルテノンとアクロポリス：薄明から薄暮までの陰影の変化 / アテネ：筆者撮影，2004年9月11日
Nikon F100 / Nikon 28-200mm 1:35-56D / FUJI RDP III
- Fig.7 アッタロスの柱廊 アテネ 筆者撮影 2003年9月 Nikon F100 / SIGMA 14mm 1:28D / FUJI RDP III
- Fig.8 パルテノン神殿（南西面列柱）アテネ 作者撮影 2003年9月
- Fig.9 フルーティン（アッタロスの柱廊）アテネ 作者撮影，2003年9月
- Fig.10 女神像 / アテネ国立博物館 / アテネ：筆者撮影
- Fig.11 ルクソール神殿の列柱 / ルクソール：筆者撮影
- Fig.12 アクエンアテン像ナ / ナイルエジプト博物館 / カイロ：筆者撮影
- Fig.13 パルテノン神殿（南東より） / アテネ：筆者撮影，2004年9月11日
- Fig.14 飛梁（ノートルダム大聖堂） / バリ：筆者撮影，1989年
- Fig.15 梁を飾る浮彫りパルテノン神殿 / アテネ：筆者撮影
- Fig.16 梁を飾る浮彫りパルテノン神殿 / アテネ：筆者撮影
- Fig.17 キリストのモザイクアヤソフィア寺 / イスタンブール：筆者撮影，1989年
- Fig.18 改修中のアヤソフィア寺内部 / イスタンブール：筆者撮影，1989年

執筆者

神田 每実（美術学部彫刻専攻 教授）